Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-04

幽霊の誕生

村田, 竜道

(Citation)
近代,95:33-75

(Issue Date)
2005-09

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81001737

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001737

幽霊の誕生

村田竜道

一　死者または死霊に対する恐怖

ジェイムズ・フレイザーによれば、古代においてコーカサスのアルバニア人によってまもられていた、死者の名前を口にすることを避ける慣習、あるいはそれを禁止する掟は、「今日でも未開民族の間で厳格にまもられている」[1]が、それは死者の名前を呼ぶことによって、過去の悲哀が呼び起こされるからであるばかりではなく、むしろ「この掟の主要な動機は死霊を呼び起こすことに対する恐怖にある」[2]のである。

死者の名前を呼ぶことを禁止する慣習、あるいは掟は、ハドソン湾地域からパタゴニアにいたる間のアメリカ・インディアンの全部族に普及していて、コロンビアのゴアジロ族にあっては、遺族の前で死者の名前を口にすることは、死によって罰せられるおおきな罪悪なのである。この掟はさらにまた世界各地の遠く隔てられた諸民族の間に広く共通して見出され、シベリアのサモエド族、南部インドのトダ族、タタール地方の蒙古人、サハラのトゥアレグ族、日本のアイヌ、東部アフリカのアカムバ族およびナンディ族、フィリッピンのティングィアン族とニコバル群島、ボルネオ、マダガスカル、タスマニア島の諸民族にあっても、死者の名前を口にすることは忌むべきこととみなされてい

る。たとえばヴィクトリアの土着民は死者のことを話題にすることはほとんどなく、その名前を口にすることはまったくない。かれらはやむをえず死者のことを話題にする場合は、「失われたもの」[3]あるいは「すでにいない可哀そうな人」[4]などとささやき声で言う。死者を名指して話題にすれば、太陽が沈む、西の彼方の国に永遠に行ってしまうまでは、しばらくの間この地上をうろついている死者の霊の怒りを招くからである。またサハラのトゥアレグ族は死者の霊が帰ってくることを恐怖し、死者が出ると、天幕を替え、永久に死者の名前を口にせず、死霊の招致または呼び戻しとみられるいっさいのことを回避し、手段をつくして死霊の帰参を妨害するのである。南部オーストラリアのアデレイドとエンカウンター湾の諸部族にあっては、死霊の注意をひくことがないように、死者の名前を呼ばないばかりか、死者と同じ名前をもつものはこれをやめて、一時的な名前をつけるか、手当たり次第に選んだ名前で呼ばれるようになり、また北アメリカ・インディアンの場合には、死んだばかりの人と同じ名前をもつものは、男女にかかわりなくそれを捨て去り、まったく新しいものに変更しなければならず、名前のつけ替えは、死者に対する最初の儀式にあたって正式になされさえするのである。同じように死霊の帰参を妨害するために、北西部アメリカ・インディアンの諸部族では、死者の近親者はその名前を変えることが多いが、それは親しいものの名前が繰り返されるのを聞けば、死者はそれに誘われて地上に戻ってくるという信仰によるものであり、キオワ・インディアンにあっても死者の名前は親族のいるところでは決して口にされず、家族の誰かが死ぬと遺族は残らず名前を変えてしまうのである。ニコバル群島の服喪者にいたっては、名前を変えるばかりか、死霊がみても見分けがつかないように、髪の毛をすっかりそり落としてしまいさえするのである。さらにまた死者の名前が、たとえば動物、植物、火、水などのような通常の名前と偶然に一致する場合には、それを日常の用語から除外して、ほかの言葉で間に合わせたり、かわりに新しい言葉が造られる。旧イギリス領ニュー・ギニアの多くの部族でも、死者の名前が発音されると死霊が戻ってくると信

じられていて、死霊の帰参は好まれないので、死者の名前を口にすることはタブーであり、その名前が偶然に通常語と一致する場合には、そのかわりに新しい言葉が必ず造られるのである。[5]

このような掟は生活を営む上で煩わしい制約となり、日常生活の営みを著しく阻害するにちがいないが、それにもかかわらず、掟を遵守し、死霊の帰参を妨げようとするのは、死者たちの魂は死の瞬間から生き残ったものたちに対して嫉妬心に燃えて、災いをたくらむ悪霊となって、しばらく後になって安息を得るまでは、その近辺を徘徊し、生き残ったものたちに対して死や疫病、そのほかさまざまな災厄をもたらすだろうと想像されるからである。かれらは、「〈悪霊になった死者の魂に対する恐怖〉に悩んでいる」[6]のである。とりわけかけがえのない、愛しい死者の霊魂は遺族にとって大きな脅威だった。死者との血縁関係が深ければ深いほど、死者に対する恐怖は大きいのである。「かけがえのない家族の一員はその死の瞬間に悪霊となり、この悪霊から遺族たちは敵意しか期待できず、この悪霊の邪悪な欲望から遺族たちはありとあらゆる手段を用いて身を守らなければならない」[7]のだ。エードゥアルト・ヴェスターマルクによれば、「死者たちの悪意は通常よそ者にのみ向けられ、その一方死者たちはかれらの子孫や同族者たちの命と安否を父親のように気遣っていると、人は以前には信じていたという主張」[8]は誤りであって、たとえば「マオリ族は、〈もっとも身近で、もっとも愛された親類でも死後その本質を変え、かれらの以前の愛する人々にさえ悪意を抱くようになる〉と信じていた」[9]のである。それというのも、死は人間を見舞う最悪の不幸とみなされるので、死者たちはその自分たちの運命にひどく不満を抱いているのである。[10]それが暴力的なものであろうと、それが魔術によって引き起こされるのであろうと、いずれにしても死は非業の死であり、人は殺されることによってのみ死ぬのである。[11]この理由からだけでもすでに、霊魂は復讐心に燃えた、苛立ち易いものとみなされる。[12]おそらくは霊魂は生きているものたちを妬み、しきりにかつての家族のものたちと一緒に過ごすことに憧れるのである。[13]それだから、霊魂は

かつての家族と一緒になるために、病気によってかれらを殺そうと企てるのだ。[14] なるほど、死者たちは愛しいものたちと一緒になろうとのぞんでも、死霊としてさ迷うことができるだけであって、生前のままにかれらのもとに帰参することはできないので、愛しいものたちを連れ去ろうとするのである。ハンス・ナウマンもまた、なるほどナウマンはアニミズムに先行するプレ・アニミズムの段階を想定するので、かれの場合には死霊ではなく、死者そのものではあるが、その「死者たちが悪意をいだき、敵意に燃えた魔神にならなければならない」[15]のは、死者たちはしきりに仲間を求め、「家族のものたちへの憧れ」[16]にその身を焼くからで、この「死者たちに帰せられた人間的欲求こそが、まさしくかれのいだく敵意の主原因になった」[17]と言うのである。

死者に対する恐怖は、「未開人」にのみ見出されるのではなく、ヨーロッパの古代においても、人々は死者あるいは死霊に対して大きな恐怖を抱いていた。ギリシャ人は死者に対して大きな不安を抱いていて、かれらの死んだ英雄の霊魂をも極度に苛立ちやすいもの、後にはもっぱら悪意に満ちたものとみなしたのだった。[18] ローマ人もまた死者たちは夜の夜中に徘徊し、人間を襲い、疫病をもたらし、あるいは人間を狂気に追いやると信じていて、死者に対する恐怖に悩んでいたのだった。[19] 一七七三年に発表され、ヨーロッパ的規模で大反響を呼び起こしたゴットフリート・アウグスト・ビュルガーのバラード『レノーレ』は発表当時からそのバラードが依拠したオリジナルの民謡が多方面において詮索されたが、この愛しい少女のもとに、これを連れ去ろうとして帰ってくる異国で死んだ死者のモティーフは、世界各地の民話の中に広く見出され、ヨーロッパ、とりわけスラブの伝説圏には頻繁に現れる。[20] これらの伝承は死者に対する古代的恐怖を伝えていると言えるだろう。たとえばポンメルンに伝わる伝説では、[21] 遠い異国で戦死した兵士は、愛しい恋人のもとに帰ってきて、その愛しい少女をはるか遠方のみずからが葬られている墓場へと連れ去ろ

うとするのである。そして少女は震えおののきつつ、必死になって死者から逃れようとするのである。見知らぬ家に閉じこもった少女は、追いかけてくる死者の「指輪を外に放り出せ」という叫び声に応じて、婚約指輪を棒切れの先につけて外に突き出すことによって、死者の追跡から逃れることができた。死者はたちまち消え去り、後には半ばまで炭になった棒切れだけが残されていたというのだ。またメクレンブルクに伝わる伝説では、[22]墓地のわきに立つ死体の安置所に逃げた少女は、その安置所の前に立っていた見知らぬ婦人の知恵によって死者の追跡から逃れることができる。婦人は少女の白いエプロンを箒の柄の先につけて、「お前の花嫁だよ」と叫んで、それを窓から外に突き出す。死者は掻き消え、後には黒焦げになった白いエプロンが残されていたというのだ。なるほど生き残ったものが死者を悼み、あるいは未練の情にかられ涙を流すことは、死者から安らぎを奪い、死者は安眠できないので、死者は生き残ったものを連れ去るために、あるいは生前の関係の解消を求めて帰ってくる。死者もまた今生に未練を残しているのだ。念仏による極楽往生を説く浄土教が十萬億土の遥か彼方に極楽浄土を置いたのは、数々の戦乱によって家の没落が相次ぎ、祀られざる亡霊が悪意を抱いてしきりに徘徊するので、これを一網打尽的に遥か遠方へと追いやってしまうためだったが、[23]古代西欧においても、死者の国は西の果て、海の彼方、離島、山の彼方といった具合に可能な限り遠方の地に置かれたのである。それは、困難な、長い道のりの旅を怖ろしい死者たちにあてがい、かれらの帰還を不可能にするためだった。[24]ごく最近まで、日本で死出の旅に旅立つ死者に草鞋を履かせたのと同じように、死者にはその長い旅への旅立ちに際して一足の靴（todtenschuh）があてがわれたのである。ヘンネベルク地方ではこの慣習はすでに消滅したが、ヤーコップ・グリムが聞いたこととして伝えるところによれば、十九世紀初頭においてもなお、死者に対する最後の表敬、つまり葬儀は「死者の靴」（todtenschuh）と呼ばれ、さらには死斑（leichenmal）もまた「死者の靴」と呼ばれたのである。[25]

大河あるいは大海によって冥府を此岸から隔てたのも、これと同じ意図によるのだった。何しろ航海は危険に満ちた、もっとも困難な旅だったからである。古代ギリシャでは、冥府ハーデースは大河アケローンによって此岸から隔てられ、あるいは大河ステュクスによって七重に包囲されていた。死者たちは渡し守カローンに一オボロスの渡し賃を支払い、アケローンを渡ったのである。そして冥府ハーデースには忘却の河レーテーが流れていて、死者たちは冥府に到着すると、ただちにこの河の水を飲んで、この世での記憶を失うのだった。ライン河やドナウ河もまたかつては此岸（Diesseits）と彼岸（Jenseits）とを分かつ境界だった。あるドイツの伝説は、アケローンと渡し守カローンにまつわる古代異教徒の神話の名残をとどめている。伝説によれば、[26] ある嵐の夜に、眠りこけている渡し守は一人の修道僧によって起こされる。修道僧はドナウ川の向こう岸に渡してくれるようにと言って、渡し守の手に渡し賃を押しつける。渡し守が準備を整え、小船を漕ぎ出そうとすると、今にも沈んでしまいそうなくらいに、そしてまた渡し守自身が自分の場所さえ確保できないほどに、小船には多くの見知らない客たちが乗り込んでいる。苦労の末に対岸に着き、最後の一人が船から下りたかと思うと、たちまち突風が吹いて、渡し守は小船もろともにもとの岸に吹き戻される。するとまたしても新しい客が待っていて、船に乗り込み、その先頭のものが、氷のように冷たい指で渡し賃を渡し守の手に押しつけるのだ。またほかの伝説では、修道僧が亡霊たちと渡るのはライン河であり、渡し場はシュパイアー近郊にあった。[27]「ライン河を渡る」（über den Rhein fahren）とは「死ぬ」（sterben）ことを言ったのである。[28]

Die Insel Brittia ――すなわちイギリスもまたかつては死者の島、冥府とみなされていたのだった。五世紀末のビザンチンの歴史家プロコピウスは『ゴート戦記』のなかで、かれ自身がしばしば住人から聞いた話として、さきのドイツの伝説ときわめて類似したケルトの伝説を伝えている。かれらは、死者の霊魂はかの島、die Insel Brittia

に渡されると信じているのである。フランク王国支配下の大陸の岸辺には、古くから税を免除された漁師と農夫が住んでいて、その特典を享受するかわりに、かれらは死者の魂を船で渡す義務を負っていた。その任務は輪番であったが、夜にその任務につくものは、明け方になってようやく寝ることができるのである。それというのも、真夜中にドアを叩く音が聞こえて、くぐもった声で呼びかけられるからである。呼びかけられるとすぐにかれらは身を起こして、岸辺に行くのである。かれらはそこにかれらのものではない船を見出す。そしてすぐにかれらはその船に乗り込み、櫂を手にして、舟を漕ぐのだ。船には、船の縁が水面についてしまうほどに、多くの人が乗り込んでいるのだが、その姿は一つとして見えない。そして自分の船でならそこに着くのにいつも一昼夜必要なのに、一時間もすればdie Insel Brittiaにたどり着いてしまうのだ。島に到着すると、船は浮き上がり、船底がわずかに水面に触れるほどに軽くなり、それによって乗客が下船したのがわかるのだが、あいかわらず下船時にも誰の姿も見えない。しかし船頭たちには下船する一人一人に名前と祖国とを尋ねる声が聞こえるのだ。船が女性を渡した場合には、かの女らはその夫の名前を申告するのだった。[29] 一説によれば、その魂の渡し場はブルターニュの最西端、ラ岬近郊にあった。[30] 十九世紀の初頭になおブルターニュのトレギエ河畔のプルーゲル村では、死体を小さな岬をはさんだ向こう側の教会に、陸路をとって行けば近いのに、小さな船に乗せて、海路で岬を迂回して運んでいた。[31]

また一九三〇年代になおベニスでは、アーノルト・ベックリーンの「死者たちの島」さながらに、死者たちはラグーンの中に浮かぶ聖ミカエル島にゴンドラに乗せられて運ばれ、そこに埋葬されたのだった。[32] この浮島のごときミカエル島には聖ミカエル教会が建っていて、島はこの教会の名前にちなんでそのように呼ばれることになったのである。バチカンによって死者たちの魂をその手に委ねられた首天使ミカエルはその翼を霊魂たちの上に広げ、そして最後の審判の時には、霊魂を秤にのせて、罪の軽重をはかるのである。[33] 天使ミカエルこそは、旧約聖書によれば、魂の秤を

持つ、天の支配者であり、裁判官なのである。[34] ミカエル島はもともとは一〇〇〇年頃トスカナに設立されたベネディクト派の一教団、カマルドゥレンザー教団の隠遁地であったが、それが後に公設の埋葬地になったのである。[35] この島に毎日黒いゴンドラが死者を埋葬するために渡っていくが、遺族たちは岸辺で死者を見送り、船頭のほかは司祭たった一人がゴンドラに乗り、死者に伴うのである。[36] キリスト教の埋葬は凱旋の性格を持っているので、[37] ゴンドラの上には蝋燭と松明が燈され、ゴンドラは燃えるように水の上を滑っていくのである。神々の父オーディンの息子、光と春の神バルドゥルの屍骸は燃える船に乗せられ、荒海の彼方に押し出されたが、死者をのせて聖ミカエル島に渡っていくゴンドラは、さながらこのバルドゥルの屍骸をのせた燃える船のごとくだっただろう。この埋葬の行われる日には町中が黒衣で覆われ、香がたかれ、ベニスの空には煙が渦巻くのである。[38] いつもは陽気な、活気に満ちたベニスは、厳かな悲しみのうちに沈むのである。[39] ミカエル島を埋葬地にしたのは、ベニスは十三世紀初頭のヨーロッパにおけるペスト大流行の際にペスト菌の最初の玄関口だったのだから、おそらくはこのペスト大流行とかかわりがあると想像されるが、しかしそれは衛生上の理由からではなく、死者の抱く悪意に対する恐怖によるのである。死体に触れたものが次々に死んでいくのを見たとき、死体がペスト菌を媒介していることを知らなかった人々は、その原因を死者そのもの、死者の抱く敵意に帰したのである。死者に対する古代的恐怖がよみがえり、死者の隔離と封鎖を目論んだのである。生き残ったものたちにとって、嫉妬心に燃えた、危険な敵である死者にあらゆる不幸、あらゆる精神的肉体的悩みの原因を押し付けたのである。[40] 死者または死霊の帰参はどのようにしても妨げられなければならない。深刻な疫病が流行するときには古い信仰が息を吹き返す。[41] ハンス・ナウマンによれば、疫病に最初に感染し、死んだものはヴァンパイアなのである。[42] 墓場からよみがえり、生き残ったものたちを連れ去るのだ。一七五〇年になお西プロイセ

ンのヤーコップ村で、ヴァンパイアであって、遺族を次から次と連れ去ったヴォルシュレーガー男爵は、家族会議の決定に基づき墓を暴かれ、首をはねられたが、一八六六年にコレラが流行したときには、当局はこのような死体に対して加えられる冒瀆を力尽くで阻止しなければならなかったのである。[43]

シュプレーヴァルトでも死体は小船にのせられ、埋葬場所に運ばれた。[44] そして死体を積んだ小船の後を遺族をのせた船が随走したのだった。河川は死者の国と生者の国とを分かつ自然の境界であり、実際またこのように死者は河の向こう側に葬られたのだった。家から死体が運び出された後、その背後から水が満々とたたえられた甕を投げつけて、これを割り、水を撒き散らす習俗は、民族の違い、宗教の違いをこえて、すべての古い文化のうちに見出されるが、[45] これは死者の島、死者が渡らなければならない河、あるいは大海の観念が姿をかえたものと考えられる。生者と死者の間に小さなシュティクスを置いたのである。[46]

古代日本においても船葬が行われていたことが指摘されているが、[47] 死者は船にのせられて、帰参が不可能な海の遥か彼方を目指したのだろう。そしてまた中国の唐時代に蔵川が著した偽経『仏説閻羅王授記四衆逆修生七往生浄土教』において初めて三途の川が言及されるが、日本においては、その偽経の影響を受けて平安時代末期に書かれた偽経『地蔵菩薩発心因縁十王経』に死者が渡らなければならない三途の川が現れた。[48] いまや死者の国とこの世とが川によって画然と隔てられたのだった。

『記紀』によれば、イザナギノ命は愛しいイザナミノ命をヨモツクニに訪ねたとき、蛆たかる、腐敗した愛妻の変わり果てた姿を目にして、恐怖に駆られて逃げ出したが、はたしてイザナギノ命はイザナミノ命とその配下の女神に追われてヨモツクニからかろうじて逃げ出したあと、「思えば私は、なんという厭な、醜い、きたならしい国にわざわざ出かけて行ったものだろう。私の身体はすっかり穢れてしまった。この穢れた身体の禊をしなければならな

い」[49]と言って、「筑紫の国の、朝日射す、橘の木の青々と生い茂る、海に近い河口のあたりの阿波岐原で、穢れた身体を清めるための禊ぎ祓いの儀式」[50]を行い、川の水で穢れを祓ったのだった。イザナギノ命の禊は三途の川、あるいは船葬との深いかかわりが想像されるが、穢れを祓うための水の利用は世界各地の習俗に見出される。クラインパウルによれば、今日でもほかの家から持ってきた水を入れた瓶が出入り口に置かれ、その水で喪に服している人たちが手を洗い、その水を身体に振り掛けるのは、死体との接触が穢れをもたらすからである。[51]ヴェスターマルクは、「人類学者は埋葬の儀式の説明に際して霊魂の意志の働きにあまりにも重きを置きすぎた」[52]と考え、死の不浄という観点の導入をはかった。たとえば、かつて朝鮮の首都の市門には小さな「死者たちの門」とよばれる、通常使用されない、特別の通用門があり、死体だけがこの門を通って運び出されたが、これは通常使用される門を穢れから守るためなのだ。[53]なるほどこのように死を穢れとして忌む心性は葬儀にともなう慣習の中に世界中のどこででもうかがわれ、しかも、「この点では、古代人はわれわれよりも清潔好きだった。それというのも、かれらは死者との接触による穢れを、まさに伝染による毒殺とみなしたからである。したがってかれらの清潔好きは医学上の免疫に即していたのである」。[54]しかしながらまた「もちろん、穢し、汚染するのは、穢れではなく、(死者の)悪意そのものだった」[55]のだ。腐敗し、崩れていく屍骸、その恐ろしい光景がそもそも悪霊の概念を伝えたのだとしても、[56]水によって祓い清められるべき穢れとは、この悪霊になってしまった死者の悪意にほかならなかった。

だからまたこの悪霊にかわりつつある死者の邪悪な眼差しから身を守るために、死者の目を閉じたのだった。[57]生きている死体であれ、悪霊であれ、「死者が友好的な目的で帰ってくることはほとんどない」[58]ので、生き残ったものたちはこれを怖れ、死者からあらゆる帰参のきっかけと可能性を奪い取った。その帰参を防ぐために、水を利用したば

かりではなく、そのほかさまざまな手段を用いたのだった。「防御のための儀式が、一部はたった今死んだばかりの死者自身に対して早くも向けられる」[59]のである。たとえば、生きているものたちが、燈明をともし、騒音を立て、武器を持って遺体を見張るのは、死者のためにのみそうするのではなく、むしろ生きているものたちこそが死者から身を守るためなのである。[60]死者は、足を戸口に向けて棺台にのせられ、二度と戻ってこないように、そのまま外に運び出され、また死餓鬼（Nachzehrer）にならないように、死者は口を閉じられる。[61]同じ意図から、死体を埋葬するとき、その顎の下に土塊をおいた。そうすれば死者は下顎を動かすことができないからだ。[62]死者の身なりが整えられ、櫛、髭剃り用具、小銭、喫煙パイプ、飲み物など、死者が生前とくに好んだもの、あるいは必要欠くべからざる日用品が棺桶のなかに入れられるのも、快適な死出の旅路を願ってのことではあるが、しかしながら、それは死者に対する深い愛情と同情からではなく、できるかぎり快適に、かつすみやかに死者に遠ざかってほしいからなのである。[63]あるいは死者たちは墓の中でも生きつづけると考えられたので、かれらの日頃愛用のものが欠けていれば、それを取り戻しに死者たちが帰ってくる可能性があるから、埋葬のときにかれらの柩の中に死者とともにそれらを納めたのである。[64]あるいはまた立ち去っていく霊魂のために開けはなたれた窓や戸口は、一たび死体が外に運び出されたら、即座に閉じられなければならないし、柩は家の前で三度交差させて置かれるが、これによって死者は方角を見失い、死者にとって帰参は困難になるだろうからである。[65]悪霊となった死霊を迷わすために、表札を取りはずしたり、誰彼の見分けを困難にする喪服を着用したりさえするのである。[66]

古代日本においても死者の霊魂は荒魂（アラミタマ）として怖れられた。柳田国男は山形県の内郷村に滞在した時、軍艦河内の殉難者の空葬に出会ったが、この村で行われている見慣れない風習が、かれの気を大いにひいた。[67]喪家の門の外にわずかに芝土が盛られ、墓標のような一本の柱が立てられていて、その柱の先端に小さな制札が打ちつけら

れていたのである。夕方にこの家の前を通ると、その標木の下の芝土に、白紙が挿し挟まれた、長さ七、八寸の竹の串がたくさん挿してあった。この竹串は、ほかの村の前の月に葬式のあった家の門口にも挿されていて、また十数本の竹串が挿されていた丁字路の辻も見かけたが、はたしてこの竹串は、野辺送りの帰りに近親が挿していったものであり、そして竹串に挿し挟まれた白紙には、寺の住職によって「大道透二長安一」と書かれていたのである。柳田に言わせれば、この文言に見られる「透」は「通」の誤りであり、かつて書かれた五言絶句の偈が、今では簡略化されて一句のみが書かれるようになったのであるが、この葬式の日に竹串に書かれた「大道透二長安一」が、禅語としてどのような哲理を含んでいたかはともかく、竹串が道の辻に立てられていたということ、あるいは喪家の門口の道路に接した場所に立てられていたということから判断して、この「大道透二長安一」を説き聞かす相手は明らかに竹串に依った亡霊であり、その謂いは「汝の天地は廣い、娑婆の因縁に執着するな」[68]であり、竹串を立てる動機は、親族故旧の身に縋って、帰参しようとする亡霊の駆逐である。すなわち亡霊の害を怖れて、これを駆逐しようというのである。柳田は、宗派の異同にかかわらず、この竹串が立てられるということに、「我國の巫術（Magic）が今の宗教に對して、相持して下らざる實状」[69]を、あるいは「大道透二長安一」という偈に「佛教の教理と平民の俗信との一種の妥協の例」[70]を見出すのである。さらに柳田は今なお行われているそのほかの習俗のなかに「平民」のいだく死霊に対する古代的恐怖、あるいはその痕跡をたどるのである。柳田によれば、ある村では、壁を壊し、窓を広げて、出棺するが、これは通例の道を使えば、通例の方法で亡霊が戻ってくるかもしれないという懸念によるものである。あるいはある地方では竹籠、臼の類を以って座敷中を轉がし廻るところもあるが、これも目に見えない死者の霊魂が忍んでいないかどうか確かめる手段である。あるいは迂路をとって、流れを渡って帰るものもあり、あるいはまた塩を振り撒くことはよく見受けられるが、これらはいずれも、死者との絶縁を目論んでのことであり、古くはイザナミノ命

が櫛を投げ、杖を立てて黄泉の国との堺を作ったのと「同一の思想」にその起源を持つのである。つまり死は穢れとして忌むべきものであり、死霊は悪意を抱いている悪霊にほかならないのである。盂蘭盆会のみならず、年の暮れにも行われていた魂迎え、聖霊送りの祭りも、じつはその起源においては、「捨てゝ置けば邑落に死者の影が充満して、疫病を流行らせ害蟲を蕃殖さす所以であるから」[71]、死霊が帰ってくる、「危険な期節を選んで一斉にこれを駆逐するのが」[72]目的であって、「成る丈け安い費用で、一度に少なくとも我村から追ひ出してしまはねばならぬ」[73]ので、「松明を點し大きな聲を出し、佛教信仰の盛んな地方では念佛を唱へ、且つ踊り、又銅鑼や鉦を叩き、殆ど煩累に堪へずして立ち退くやうに仕向けたのである」[74]。柳田は、「後世の考えから云へば、臨終の際迄嘆き縋って別れを惜しんだ程の情愛のある者が、一朝にして斯の如き冷遇を受くべき道理がないと思はれるかも知れぬ。併し亡霊の人間に對する態度は、又格別のものであった。既に『合邦が辻』の浄瑠璃には、〈肉縁の深いもの程猶恐ろしい〉と云ふ有名な文句があって、此思想の痕跡は眼前に迄及んで居るのである」[75]と言うのである。

五来重によれば、死んだ人の霊魂は最初はすべて荒魂、あるいは新魂であって、四十九日から五十日くらいまでは祟りやすく、一周忌をへて、あるいは三周忌など何回かの年忌をへて、徐々に「むかわり」（生まれ変わり）、和魂（ニギミタマ）に昇華するのである。そしてこれを五来は「霊魂昇華説」と呼ぶ[76]。葬式の儀礼は、死んだばかりの人の荒れすさんでいて、祟りやすい、怖ろしい魂を鎮めるために執り行われるのである。古代においては貴顕の人の死体を棺に納め、たとえばこの棺を周囲の柱に白布を巻いて包囲し、死者の霊魂を閉じ込めた。この殯の習俗は、怖ろしい荒魂が徘徊し、災厄を起こさないように、これを封鎖するために行われた「封鎖呪術」だった[77]。祇園祭もまた祇園御霊会と称せられ、御霊会の一つだった。御霊会とは、飢饉や疫病をもたらすものとみなされた怨霊を集め、これを芸能で鎮め、川や海に送り出してしまうために、つまり「鎮送」[78]のために行われた祭りで、そのために疫病などの

流行る時節を選んで行われたのである。祇園祭の場合には、怨霊を山鉾に憑依させて、それを東の京極であった加茂川岸まで運んで、加茂川に流したのだった。[79] 大阪の天神祭りも御霊会であって、怨霊を淀川に流したのだった。[80] すなわち怨霊を一網打尽的に共同体の外に追放したのだ。空也の踊り念仏で知られる大念仏も、仏教におけるもっとも一般的な鎮魂の儀式である。[81] 疫病が流行ると、これを怨霊の祟りとみなし、怨霊を鎮魂するために行われたのである。愛知の放下大念仏は長篠の合戦の古戦場で行われる大念仏で、四人の踊り手が、大きな団扇をもって、跳躍乱舞の踊りを踊るのであるが、これは、激しく地を踏むことによって、怖ろしい霊を鎮圧し（「抑圧呪術」）、霊がおとなしくなった後に、これを団扇で追い払い（「攘却呪術」）、共同体の外に送り出そうとするものである。[82] 岩手県で多く行われる「剣舞」をケンバイと言うが、これは、「反閇」（ヘンバイ）という足踏みの動作に因む。[83] このヘンバイとは、荒れすさぶ霊魂を抑えて、追い出すために行われる「抑圧（鎮圧）呪術」の一連の動作であり、ヘンバイは古くは、ダダと言われ、「地団だを踏む」あるいは「駄々をこねる」と言った表現に、今日なおその足踏みの動作の様相がうかがわれる。[84] 仏教では、修正会や修二会で、呪師が東西南北、そして天地、つまり六方にむかって結界の足踏みをするが、能の「翁」の天地人の足踏み、さらに「千歳」や「三番叟」での激しい足踏みも、この結界の足踏みと同様のもので、この呪術的足踏みは、踊りの基本形になって、歌舞伎の「六方を踏む」型になった。[85] これは、原始的な宗教舞踊の鎮魂の仕草の芸術的変容にほかならない。つまり、足踏みをして、怨霊や悪霊を抑えつけ、その霊威を鎮め、これを共同体の外に追い払い、さらに六方に結界を張って、共同体への再侵入を防ぐのである。[86] 「剣舞」とは、剣をもってヘンバイするのである。平泉近郊の衣川の「衣川剣舞」も、義経主従の怨霊を鎮めるために行われる、高館物怪（タカダテモッケ）と呼ばれる剣舞で、足を踏み、剣を振り回し踊る鎮魂の風流である。[87] 鎮魂とは、怨霊を封鎖して、魂を鎮めるだけではなく、共同体の外に追い出してしまう意図も含み持つもので、抑えつけて、暴れないようにして、

外に追い出してしまうことであり、「鎮送」でもあるのである。[88] 今では娯楽性の高い盆踊りも、もとは「鎮魂の盆踊り」であり、その起源は大念仏にある。すなわち、大念仏から風流大念仏が生まれ、さらにそれから盆踊りになったのである。[89] 古いものほど踊りが激しく「はね踊り」と呼ばれる。[90] これは、大念仏における怨霊の鎮圧のための「はね込み」という所作の変形したものである。[91] 田楽もまた一般には豊作祈願とみなされ、あるいはまた「田夫野人の労を慰めんが為なり」と言われるが、その起源においては、怨霊を鎮めるために踊られたのだった。[92] 旱魃や長雨による凶作は怨霊の仕業だとみなされたので、この豊作の邪魔をする怨霊を鎮め、これに退散を願ったのである。豊作祈願であるにしても、それは屈折した豊作祈願だった。[93] 五来によれば、「一般に怨霊というものは、特別な事情で亡くなった人の霊だけを、ふつう怨霊といっているけれども、亡くなった人の霊というものは、ある期間はすべて怨霊」[94]なのだ。

桜井徳太郎はマブイ（死霊）の追跡から逃れるために琉球諸島周辺で行われる巫術について報告している。南西諸島から琉球列島にかけてマブイワカシ（魂別れの巫儀）が行われているが、これは、さまざまな禍を家族や村人にもたらし、とりわけ生前において親密な間柄にあった人々から魂を奪いにやってくるマブイと呼ばれる、死後遊離した死霊の憑依から逃れるために、ユタ（巫女）が執り行う巫術なのである。[95]

「民族誌が記述する類似がすべて何から何まで借用に基づいているわけではないということ、むしろある程度自然の法則にしたがって、人間の同一の根本的思考から、類似の形成物が、物質的領域においても、精神的領域においても、極めて異なった人種や地域の人々にあって、互いに無関係に作り出されえるということ」[96]は、ナウマンの言を俟たずとも、自明のことだろう。たとえば、黄泉国から逃げ出したイザナギノ命は、そうするようにイザナミノ命に命

じられた醜い女神に追われ、次第に危うくなったとき、髪が乱れないように縛ってあった黒い鬘を追ってくる女神に向けて投げ、また再び危うくなったときには、角髪に結ったその髪の右側に刺した櫛を取り、その歯を折っては後方に向けて投げ、また折っては後方に向けて投げして難を免れた。けれども一難去って、また一難。イザナミノ命はさらに多くの追っ手を差し向けたのだ。イザナギノ命は必死になって長い剣を後ろ手に振り回し、追手の軍勢から逃れ、ようやく死者の国とこの世との境にある黄泉比良坂の麓にたどり着いたのだった。そして坂の麓にあった桃の実を三つ手に取り、これを追手の軍勢に投げつけ、これを追い払い、ようやくにして難を逃れたのだった。この魔術的逃亡のモティーフは、シベリアの最北東のチュコート半島に伝わる民話のなかに見出されるのである。[97] 民話のなかで悪霊の追跡から逃れようとするものは、その追跡を妨げるために、剣、櫛や刷毛といったものを背後に投げるのである。[98] 後から追ってくる悪霊はそれを拾い、それに興味を示し、いつまでもそれと関わりあうからである。[99] ドイツでは同様の目的からヴァンパイアの疑いのある死者の埋葬に際して、その柩に漁師の網と芥子の実を入れた。[100] 生きている死者は芥子の実を毎年一粒食べ、あるいは毎年結び目を一つほどくのである。[101] 小ロシアでは、墓にいたる道に芥子の実をばら撒いた。[102] 墓からよみがえった死者はその実を拾い集めなければならないのである。かくして死者の帰参は妨げられるのだ。イザナギノ命が投げた黒い鬘は野葡萄になり、また投げた櫛の歯は竹の子になり、イザナギノ命を追いかけてくる黄泉国の醜い女神はこれを食べた。その間にイザナギノ命は遠くへと逃げたのだった。このような類似した物語は、いずれかが借用したというのではなく、「自然の法則にしたがって、同じような人間の根本的な思考から」形成されたのである。すなわち死者はすべてヴァンパイアなのである。そして遺族は「〈悪霊になった死者の魂に対する恐怖〉に悩んでいる」のである。

しかしそれにしても、かけがえのない、愛しい死者の霊魂が遺族にとって大きな脅威であり、死者との血縁関係が

深く、哀悼の思いも深い遺族がその死者に対してことさら大きな恐怖を抱くのはいささかならず謎めいて、奇妙な事態である。このような事態を前にして、この謎の解明は、多くの場合、死者が抱いているだろうと想像される、死に対する不満と「深い、鎮められることのない憧れ」[103]、あの「家族のものたちへの憧れ」、愛しい者たちと一緒にいたいという「死者たちに帰せられた人間的欲求」に求められた。あるいはまた腐敗し、醜く変形していく死体が呼び起こす恐怖のうちにその解答を求めたのだった。

ジークムント・フロイトは、その解明を精神神経症的障害の研究に基づいて企てた。たとえば妻が夫を、娘が母を死によって失うと、生き残ったものは、自分の不注意や怠惰によって、最愛のものを死なせてしまったのではないかという「辛い疑念」[104]に襲われることがまれではない。精神分析学によって「強迫性呵責」[105]と命名される、この「辛い疑念」、あるいは自責の念は、時の経過とともに徐々に薄れていくのがつねであるが、それにもかかわらず、この疑念、あるいは呵責に悩む人が、自分はいかに心を込めて病人を看病したかという記憶を呼び起こしても、あるいは「辛い疑念」を事実に基づいて消し去ろうとしても、なお呵責の念に苦しむような事例がしばしばならず見出される。この「ある意味では正当であり、それゆえにこそ否定や異議に屈することのない」[106]強迫性呵責による「苦悩の秘密の原動力」[107]は、その呵責に悩む人自身にも意識されない、ある願望のうちに潜在するのである。最愛の人の「死に不満ではなかった願望、そしてもし力を所有していれば、死を惹き起こしたかも知れない願望」[108]、すなわち〈死んでしまえばいいのに〉という願望が、最愛の人の死を悼み、かつまた自責の念に苦しむ人のうちに意識されることなく潜在するのである。ヴェスターマルクによれば、死が人間を見舞う最大の不幸とみなされる限り、暴力による死であれ、自然死であれ、いずれにしろ死はつねに非業の死なのだから、人は殺されることによってのみ死ぬのだ。だからいかなる死にも区別を認めなかった。フロイトの場合には、「意識されない思考」[109]にとって、すなわち死によって、死者

に対する隠された敵意が無意識裏に充足させられるので、自然死によって死んだ人もまた殺された人である。つまり隠れた殺意、悪意ある願望がかれを殺したのだ。その意味で、フロイトにとって、いかなる死にも区別を認めないヴェスターマルクの主張は正しいのである。そして実は、最愛の人を失った後に生き残った人を苦しめる呵責は、この意識されない願望、隠れた敵意の反動にほかならないのである。この人間感情の両価性は、ある人の場合には多く、またある人の場合には少なく、どのような人の素質のうちにも備えられていて、「この根源的な感情の両価性」[110]が高い度合いでその体質に配備されている場合には、激しい「強迫性呵責」が生じ、「強迫神経症」に悩むことになるのである。このような両価性が、「脅迫神経症患者たち」[111]と等しい度合いで、あるいは「今日生きている文明人において見出される以上に強い度合いで」[112]、「未開人たちの感情生活」[113]にも付随するのであるが、しかし「未開人」の場合には、いたましい喪失の後に「脅迫神経症患者たち」を「強迫性呵責」となって苦しめる、無意識のうちに潜在する敵意は、べつの運命をたどるのである。すなわち「未開人」は敵意を敵意の対象である死者に転位すること、精神分析学の用語では「投射」[114]することによって、隠れた願望の充足の反動として「脅迫神経症患者」を苦しめる「強迫性呵責」からその身を守るのである。生き残ったものは、愛する死者に対してかつて敵意ある感情を抱いていたことを否定するのであるが、いまや死者の魂が敵意を抱いて、生き残った者たちのあいだを徘徊するのである。このように霊魂が抱く悪意の起源をたどれば、「死者にもっとも近く、かつては最も愛された遺族こそが、霊魂の悪意をもっとも怖れなければならないのは自明のことなのである」[115]。「生き残ったわれわれはいま、故人から解放されたことを喜んではいない。そうではなく、われわれは故人を悼んでいるのだ。しかし奇妙なことにかれはいじわるな悪魔になってしまった。われわれの不幸はこの悪魔を満足させるだろう、そしてこの悪魔はわれわれに死をもたらそうとしている」[116]のである。

二　先祖崇拝と幽霊の誕生

ニコバル群島では、死者の名前を口にすることは禁止されるのであるが、同時に死者と同じ名前をもつ通常の事物の名前も新たな造語やほかの言葉によって言い換えられ、これによって言語そのものがきわめて不安定になるばかりか、これは、「政治生活の連続を破壊し、過去の事件の記録を全く不可能にしてしまわないまでも、不確実かつ不明瞭なものにする」[117]のである。クラマト族もまた、死者の名前の使用を禁止するばかりか、死亡した人の人柄やその人の行動、その人が役割を果たした事柄すべてについて、それを語ることを禁止する掟にしばられ、そのために「一世紀以上遡り得る歴史的伝統をもっていない」[118]のである。フレイザーの言うところによれば、「しかしながら、多くの部族において、過去の記憶を抹殺しようとするこの慣習の力は、人間の心性の自然的傾向によってある程度まで弱められ阻害されている。もっとも深い印象を漸次稀薄にする歳月は、死の神秘と恐怖とによって未開人の心に押された刻印を全然抹消してしまわぬまでも必然的に不鮮明にする。晩かれ早かれ愛するものの記憶は次第に褪色して行くので、彼は昔よりは死者についてより多く語ることを欲するようになる」[119]のである。実際死者の名前を呼ぶことを禁止する掟は、ヴィクトリアの諸部族のあるものにあっては、服喪期間中に限って有効であり、北アメリカのある部族では、服喪者が悲嘆を忘れた頃には、この掟の遵守はその厳格さを失い、死者が有名な戦士であった場合には、死者の子孫の一人、たとえば曾孫がその名前を襲名することもあるのである。[120]この掟は、「あらゆる場合に、死亡の時点から遠ざかるとともに、色あせていくように思われる」[121]のである。なるほど心に深く刻まれた印象も長い歳月を経れば稀薄になっていき、あるいは死亡した愛するものの記憶は早晩色褪せていき、やがて死者についてより多く語ること

を欲するようになるのは、「人間の心性の自然的傾向」であるだろう。そしてここにはすでに先祖崇拝（Ahnenverehrung）の開始が告げられてもいるのである。死者を悼みつつ、かつまた怖れつつ、短期間、あるいは生涯にわたるほどに長期の喪に服しているうちに、愛する死者についての記憶は色褪せ、悪霊となった死者に対する恐怖が鎮静化していく。そしてついには悪霊はその悪意を鎮め、「初めは悪霊として怖れられていた、その同じ霊が、いまやもっと友好的な使命に向うのである。すなわち先祖として崇められ、援助のために呼びかけられる」[122]のである。

桜井徳太郎は、「およそ日本人の死霊観には、死後の期間を前後に大きく二分し、そのそれぞれにまったく異質的な機能が働くものであることが指摘されている」[123]と言った後に、それにつづけて、「死の直後から三十三年ないし五十年間は、みずみずしい死者の霊魂が、喪家または地域社会の周辺に浮遊していて、その影響力を強く及ぼしている。ことに死後四十九日の忌み明けまでは、とくに近接の位置にあってその力が強く働く。したがって死者と縁のつながる人々は、戦々兢々の日々を送り、かつ、死者の供養に心を砕く。新盆を挟んで一周忌がすむまでは、この気持ちの休まる時がない。ところが、三年忌・七年忌・十三年忌・十七年忌と、つぎつぎと供養の年忌法要を繰り返すうちに荒々しい死者の霊威はしだいに鎮まり、また穢れた死霊はしだいに純化されて、ついに三十三年忌ないし五十年忌を最後として、完全に清まり、神化する。つまり死霊から神への転化が見られ、ここで神格化された祖先神の系列に編入される。したがって爾後の取扱いは、死者供養の範疇を越え、神祭の領域に含められる。こうして死霊→祖霊→祖先神のプロセスが完結するわけである」[124]と言って、先祖崇拝の誕生の過程をたどった。この過程は、古代の土着の霊魂信仰に外来の仏教思想がかぶさり、在来信仰と外来信仰とが習合することによって、いわば啓蒙化、文明化されることによって、一見固有の経過をたどっているように見える。しかしながら「未開民族」にあっても、服喪の期間を経て、あるいは「決められた儀式」が執り行われることによって、悪霊は遺族たちに対するその敵意を和らげ、遺族

たちにとって親しみ深い、懐かしい霊となって回帰し、やがて祖霊へと変身するのである。クラインパウルによれば、「死者たちは、生きている者と、どんなに貧しく、乏しい生存であろうとも、生存をめぐって、相争うのである。生き残ったものたちは、死者との生存をめぐる戦いに勝たなければならない。死者は、生き残ったものに対して、嫉妬心に燃えた競争相手であり、危険な敵なのである。生き残ったものたちは、この危険な敵に手を焼き、しかし後には、供物や犠牲を捧げることによって、ようやく死者の霊、帰って来ては、災厄をもたらす悪霊と和解し、決められた儀式によって、この霊魂に自分たちに対して好意的な気持ちを抱かせることを教えた」[125]のだった。この過程の心理的側面を、フレイザーは「人間の心性の自然的傾向」と呼んで一般化したのであるが、この観点から見れば、「日本人の祖霊観」も固有のものではなく、根底においては、「未開民族」と共有する死霊観、霊魂信仰なのである。仏教における戒名もまた、「未開人」が死者の名前を呼ぶことを禁止したのと同じ心理的動機に基づいているものと想像される。戒名はもともとは聖武天皇による最初の受戒から始まり、それは生前において仏の定めた戒律を受け、仏門に入ったものに与えられたものであったが、はるか後になってようやく死者に与えられるようになったのである。はるか後、中世後期、戦乱の世において、殺戮に明け暮れる武士階級によって、死後戒名は始められたのである。修羅道に生きる武士には死者の怨霊を怖れる理由は充分すぎるほどあっただろうから、死後戒名が戦乱の世に武士階級によって始められたのは、至極もっともなことである。死者は新しい名前を得て、今生に未練を残さず、永遠に立ち去るべきなのである。

哀悼に捧げられる長い歳月の経過とともに、死者の抱く悪意、敵意、もっともこれは、フロイトによれば無防備な死者たちに投射された生き残った者たちの死者に対して抱かれていた潜在的敵意にほかならないのであるが、この悪意が鎮静化され、いまや死霊たちは、「先祖として崇敬され、援助のために呼びかけられる」のであるが、死霊を恐

怖し、かつ哀悼のうちに「未開人」によって過ごされるこの長い歳月が果たしえることは、「人類の発展のその後の経過」[126]がすでに果たし終えたので、いまでは、死者の誰でもが悪霊となって生き残ったものに禍をもたらすわけではなく、死者に対する恐怖よりも、死者との宥和的感情が優勢になり、ここに先祖崇拝の定着をみるのである。「未開民族」、あるいは古代人において個体発生的に起こることが、人類の発展過程において系統発生的に起こるのである。フロイトの言うところによれば、「時代の変遷とともに変わり行く、生き残ったものたちと死者たちとの関係を概観すれば、この関係の両価性が極度に弱まったことは、見誤りえない。無意識の、依然証明可能な死者に対する敵意を抑制することは、そのために特別な精神的浪費を必要とせずに、今では容易になされえる。以前に満足を得た憎悪と苦痛の源である優しい感情とが相争っていたところに、傷痕が形成されるように、今日では死者に対する崇敬の念が立ちあらわれ、死者ニツイテ、良キ事ノミ語レ、と要求する」[127]のである。今では神経症患者にのみこの感情の両価性が強度に見出されるのであるが、時代が変遷し、この両価性が減退するとともに、「未開人」に見出される「両価性葛藤の妥協徴候」[128]であるタブーもまた徐々に消え去っていき、「今日生きている文明人」には、「未開人」のようには、さまざまなタブーの厳格な制約に従う必要はなくなり、たとえば服喪の規定もその厳格さを失い、ほとんどの場合喪はたんなる儀礼以上の意味を持たないのである。「未開人」にあっては、長い歳月の経過をまって、あるいはその長い歳月を短縮するために考案されたと考えられる合理的儀礼制度としての服喪の期間を経て、初めて悪霊は祖霊に変身することができたが、いまや「今日生きている文明人」には、死者たちは誰彼の区別なく禍をもたらす悪霊ではなく、死者はひたすら哀悼され、場合によっては、無防備な死者たちは、しばしば擬制的な共同体の絆をつよめるために、祖霊として崇め奉られるのである。

しかしその一方で、先祖崇拝の開始は、幽霊が誕生する機縁でもある。いわば先祖崇拝と幽霊信仰とは表裏一体の

関係にある。死後すでに長い歳月が経過したにもかかわらず、あるいはあの死者に対する感情の両価性が衰退してしまったにもかかわらず、一定の限られた死霊は、なお生きているものたちに対して、その悪意、嫉み、恨みつらみを抱きつづけ、活力にみなぎった悪霊、すなわち幽霊として徘徊するのである。「人間の心性の自然的傾向」に即して、あるいは長い人類の発展過程において、死者に対する恐怖は鎮静化し、死者について多くが語られるようになり、先祖崇拝の開始が告げられるが、その一方で、「後の（恐怖の）沈静化が死者の悪意をあの恨みを抱く特別な権利を人々が認めざるをえなかった範疇、すなわち殺害者を悪霊となって追い求める、殺害されたものたち、憧れを満たされることなく死んでしまった、花嫁のような人たちに限定した」[129]のである。罪なくして処刑された人たち、未婚のままで、子供を得ずして死んでしまった人たち、そのために子孫によって供養されることのない、あるいは正式の供物を捧げられることのない死者たちもまたこの範疇に属するだろう。今や、悪意や恨みを抱く謂われが公式に承認されることによって、死霊の一部は、祖霊に「昇華」することなく、負の特権を帯びた死霊、すなわち幽霊として、生き残ったものたちを恨み、妬み、復讐心に燃えて、あるいは断ちがたい未練にひかれ、遥か遠方の冥府から河を越え、山を越え、海を越えて帰ってくる。

生を全うすることなく、暴力によって命を奪われた死者の霊魂、あるいは処刑された人々の霊魂は、とりわけ怖ろしい。ふつうなら血縁の義務である血の復讐を、かれらはみずからの手で実行するために帰ってくる。殺された場所、処刑場を通りすぎるとき、たとえ犯行に関与していなくとも、人は用心から石を投げなければならない。そうすることによって、悪霊から身を守るのである。[130]幽霊は怒りに燃えているのだから、殺害者がもっとも怖れなければならないのは言を俟たない。このような死者とならんで怖ろしいのは、「生きとし生けるものすべてに約束された性愛の喜び」[131]を知ることなく死んだ未婚の女たち、結婚式の前に死んだ花嫁たちの幽霊である。かの女たちは自然と和解がで

きず、これに不満なのだ。かの女たち、『コリントの花嫁』たちは「本能のなかでもっとも激しい性欲」[132]に悩み、墓の中で安息を見出せず、さめざめと泣くのである。「ああ！　冷たい土も愛を冷ますことができない」[133]のだ。だからかの女たちは、かつての恋人あるいは婚約者を訪ね、かれらを連れ去るのである。そしてそれに飽きたらず、さらにまたほかの若い男たちに次から次と襲いかかるのだ。かの女たちに欠けている精血を男たちから吸いとってしまうまでは、かの女たちの殺意は満足を覚えない。[134]

フロイトが言うように、文明の歴史は快楽の抑圧の歴史にほかならず、欲動の抑圧の程度が文化の水準を計る尺度であるならば、[135]幽霊たちの帰還は、文明によって抑圧された快楽、欲動の回帰なのである。自然に対する抑圧がつづく限り、死者たちは、「鎮魂」され、「鎮圧」され、そして共同体の外に「鎮送」されようとも、石を抱かされ、縛られ、足を折られて葬られようとも、火に焼かれ、首をはねられ、二度、三度と殺されようとも、幽霊になって、かならず帰ってくるだろう。幽霊とは「帰ってくるもの」（Wiedergänger）なのだ。文明が幽霊を生みつづけるのである。そしてその「文明は自由でありえる世界という幽霊（specter）に対してその身を守らなければならない」[136]のである。

なるほど今日、欲望は抑圧されるどころか、むしろ無際限に解放されたようにみえる。けれどもそれは人間が商品の流通を担う媒体として欲望し、発情する限りのことであって、いわば欲望はコントロールされているのである。そしてこの欲望でさえ決して満たされることは許されず、満たされた瞬間はたえず先送りされる。というのは商品の流通は途絶えることが許されないからである。かくして日々の生活は永遠に明日のために生きられ、やって来るはずもない幸福な明日のために、より一層禁欲が強いられるのだ。幸福な明日のための禁欲と勤勉に耐えられないものは、

失業者か犯罪者になるほかなく、いずれは居場所をもたない亡命者のように、かれらは文明の名のもとに共同体から排除されるだろう。この意味で、失業者も犯罪者もまた抑圧された欲望の回帰として怖れられるべき幽霊にほかならない。

抑圧なき文明（文化）。「この観念をここで抽象的なユートピアの思弁として論じようとはおもわない」[137]と言ったのは、ヘルバート・マルクーゼだった。「われわれの今日の文化の否定的局面は、支配的な諸制度が老朽化し、文化の新しい形態が形成され始めていることの徴候でまったくもってありえる」[138]からであり、「まさに抑圧的文化が獲得したものが、抑圧を徐々に廃棄するための前提条件を提供しているように見える」[139]からだ。たとえば、知識がいや増し、自然支配が徹底化されれば、それによっていよいよ少ない労苦で人間の自然的欲求が満足させられる可能性が増大し、文明化、すなわち欲望の抑圧を制度化するのに口実として利用されてきた欠乏（Lebensnot）は口実としての有効性をますます失い、[140]そしてまた「自由に使うことができる資源は人間的欲求を質的に変化させる方向に向う。労働の合理化と機械化は、かつて労苦（疎外された労働）の水路に流されなければならなかった本能エネルギーの量を徐々に減少させ、それとともに、個人の能力の自由な活動が措定するような、さまざまな目標に到達するために向けられえるエネルギーを解放する。技術は生活上必要な生産過程のために要求される時間を減少させ、それによって、時間を絶対必要不可欠なものの領域（生活上必要な生産過程）の彼方で諸々の欲求の展開のために用いることを可能にするが、その限りにおいて、技術はエネルギーの抑圧的な利用に対抗する」[141]からである。なるほど、「（欲望の）制約はかつて欠乏と未成熟によって正当化されたが、この制約から個人を解放する現実的な可能性が近付いて来れば来るほど、既存の秩序が崩壊してしまわないように、この制約を維持し、いよいよこれを機能的に形作る必要性はますます増大していく」[142]が、しかし「抑圧は不必要になればなるほど、それは［ひょっとしたら］その不必要になる程度に応じて

強度に行使されるのである」[143]から、抑圧の強化は、喜ばしき徴候でもありえるのである。強化された抑圧は、実はみずからその不必要性と支配的諸制度の老朽化と「抑圧を徐々に廃棄するための前提条件」が提供されていることを告げているのである。

必然と自由が和解した抑圧なき文明のもとでは、死んだ花嫁たちも、つねに満たされた瞬間を生きたのであり、かの女たちはもはや自然と和解しているので、墓の中でさめざめと泣くことはしない。死んだ時が、死ぬべき時であり、死にたいと思った時なのである。抑圧的文明のもとでのみ、死はつねに非業の死であり、早すぎた死なのである。「死ななければならない時、死のうと思う時よりも早く死んでいくものたち、死の苦しみと苦痛のなかで死んでいくものたち」[144]は、「消し去ることができない人類の罪の証言者」[145]として、抑圧的な文明を告発するのである。

マックス・ホルクハイマーとテオドーア・W・アドルノは、生き残ったものたちに対する死者の悪意を、生き残ったものたちの意識下に潜む死者に対する敵意に帰するフロイトの理論を平板なものとみなした。[146]かれらによれば、それは生き残ったものたちの死者に対する嫉妬の情に基づくのである。[147]死んでしまった方がましだったのだ。死者によって見捨てられ、今なお苦難の中にある生き残ったものたちは、その生きている苦しみを死者の悪意に帰せしめるのである。しかしいずれが正しくて、いずれが誤っているのかはともかくとして、死者の抱く悪意に変わりはない。生き残ったものと死者との敵対関係は清算され、生き残ったものと死者との正しい関係はあらためて設定されなければならない。しかしそれは、あえて言うまでもなく、死者のことをすっかり忘れ去ってしまうことによるのではない。そしてまた死者の霊を「鎮魂」し、「鎮圧」し、共同体の外に「鎮送」することによるのでもなく、死者の荒ぶれる霊魂を年忌法要を繰り返すことによって「和魂」に「昇華」し、ついには祖霊として崇拝し、かくして死者と似非的に

和解を果たすこと、あるいは生存をめぐって相争う、生き残ったものにとって危険な敵である死者の霊魂に、決められた儀式によって、好意的な気持ちを抱くよう教育をほどこすことによるのでもない。死者の霊の「鎮魂」と「鎮圧」と「鎮送」、そして「昇華」に捧げられる祭儀および芸能と文芸は、人間が共同で作り上げた社会的諸制度が快楽の抑圧装置であるように、共同体維持のために快楽を抑圧し、死者の告発に耳をふさぐための文化的制度にほかならず、抑圧をひたすら延命させ、死者と生き残った者との正しい関係を阻害するだろう。非業の死を遂げた死者たち、犬死した死者たちの霊が慰藉され、かれらのあげる怨嗟の声が封じられてはならない。ホルクハイマーとアドルノは、「絶滅（Vernichtung）に対する恐怖が完全に意識化されたときにのみ、死者との正しい関係が設定される」[148]と言った。なるほど「絶滅（Vernichtung）」の恐怖をその身をもって経験したホルクハイマーやアドルノにとっては、悲惨なことには、それを意識化することは容易いことだったろうが、しかしながら、今日では、このような大きな死と恐怖は文明に対するテロの脅威として思い描かれるだけで、「絶滅」の恐怖は下心ありありの実態を欠いた虚仮脅しであることがまれではない。そのために、多くの人々が殺され、そしてまた殺されつづけている。だから死者たちと生き残ったものたちとの正しい関係が打ち立てられるためには、むしろ、自然死であれ、事故による不慮の死であれ、災害による死であれ、病気による死であれ、兵士としての死であれ、どのようなかたちでであれ、生き残った者たちの誰にでも早晩訪れることになる小さな死、どのような意味関連の中にも還元されえない小さな死のその過酷な無意味性の前に一人一人が立つほかないだろう。この時はじめて、ホルクハイマーとアドルノが言うように、「死者と生き残ったものたちとは一つになる」[149]ことができる。生き残ったものたちもまたたしかに「死者たちと同じ状況の犠牲者であり、同じ裏切られた希望の犠牲者なのだ」[150]からだ。そしてまたこの時、死ぬことができない死者たち、墓の中に閉じ込められ、生きつづける死者たち、そして死ぬことも、生きることもできない生き残ったものたち、「わたし」

も「おまえたち」も「われわれ」も声を一つにして反鎮魂歌を歌うだろう。

I

わたしの屍體に手を觸れるな
おまえたちの手は
「死」に觸れることはできない
わたしの屍體は
群衆のなかにまじえて
雨にうたせよ

　われわれには手がない
　われわれには死に觸れるべき手がない

わたしは都會の窓を知っている
わたしはあの誰もいない窓を知っている
どの都市に行ってみても
おまえたちは部屋にいたためしがない

結婚も眠りも　そして死でさえも
おまえたちの部屋から追い出されて
おまえたちのように失業者になるのだ

われわれには職がない
われわれには死に觸れるべき職がない

II

わたしの屍體を地に寝かすな
おまえたちの死は
地に休むことができない
わたしの屍體は
立棺におさめて
直立させよ

地上にはわれわれの墓がない
地上にはわれわれの屍體をいれる墓がない

わたしは地上の死を知っている
わたしは地上の死の意味を知っている
どの國へ行ってみても
おまえたちの死が墓にいれられたためしがない
河を流れて行く小娘の屍骸
射殺された小鳥の血　そして虐殺された多くの聲が
おまえたちの地上から追い出されて
おまえたちのように亡命者になるのだ

地上にはわれわれの國がない
地上にはわれわれの死に價いする國がない

わたしは地上の價値を知っている
わたしは地上の失われた價値を知っている
どの國へ行ってみても
おまえたちの生が大いなるものに滿たされたためしがない
未来の時まで刈りとられた麥

罠にかけられた獣たち　また小さな姉妹が
おまえたちの生から追い出されて
おまえたちのように亡命者になるのだ

地上にはわれわれの國がない
地上にはわれわれの生に價いする國がない

Ⅲ

わたしの屍體を火で燒くな
おまえたちの死は
火で燒くことができない
わたしの屍體は
文明のなかに吊るして
腐らせよ

われわれには火がない
われわれには屍體を燒く火がない

わたしはおまえたちの文明を知っている
わたしは愛も死も知らないおまえたちの文明を知っている
どの家へ行ってみても
おまえたちは家族とともにいたためしがない
父の一滴の涙も
母の子を産む痛ましい歓びも　そして心の問題さえも
おまえたちの家から追い出されて
おまえたちのように病める者になるのだ

　われわれには愛がない
　われわれには病める者の愛だけしかない

わたしはおまえたちの病室を知っている
わたしはベッドからベッドへつづくおまえたちの夢を知っている
どの病室に行ってみても
おまえたちはほんとうに眠っていたためしがない
ベッドから垂れさがる手

大いなるものに見ひらかれた眼　また渇いた心が
おまえたちの病室から追い出されて
おまえたちのように病める者になるのだ

われわれには毒がない
われわれにはわれわれを癒すべき毒がない[151]

【注】

(1) ジェイムズ・フレイザー（永橋卓介訳）、『金枝篇』（二）（岩波書店）二〇〇二年、二〇三頁。
(2) 前掲書、二〇三頁。
(3) 前掲書、二〇三頁。
(4) 前掲書、二〇三頁。
(5) 以上のいわゆる「未開人」の習俗についての記述はフレイザーの前掲書に拠る。前掲書二〇三―二一〇頁参照。フレイザーのみならず、多くの人類学者たちによって、このような「未開民族」の習俗が報告されたのは、植民地主義時代の十九世紀末のことであり、もちろんこれらの人々の諸々の習俗、文化はすでに消滅し、今日ではせいぜいが観光客用の見世物として演出されるにすぎない。ちなみに、朝日新聞の古い記事の朧な記憶によれば、かつて南海の島々が大きなハリケーンに襲われ、甚大な被害を受けたとき、米軍は被災した住民の援助のためにコーンビーフなどの缶詰を島々に投下したが、それ以来住民はこの簡便な近代的食料に慣れ親しみ、これまでのヴィタミンなどを豊富に含む、滋養豊かな食料であるイモ類を主食として食べることをやめてしまった。そしてその結果、かれらの体型が変わったばかりではなく、肉体的に虚弱になり、これまでみられ

なかった近代病に罹病するようになったということである。この記事から察するに、被災住民のライフスタイルの変化によって、USAの食品会社は大いに潤い、食品産業はグローバル化したことだろう。グローバリゼーションの時代、あるいはUSA、EU諸国、ロシア、中国そして日本が経済的覇権を相争うポスト・コロニアリズムと呼ばれるソフトなコロニアリズムの時代にあっては、〈風が吹けば桶屋が儲かる〉というのはけだし本当のことだ。グローバリゼーションとはこの俚諺の世界的規模のシステム化にほかならないだろう。田村隆一が歌った、「一篇の詩が生まれるためには、／われわれは殺さなければならない／多くのものを殺さなければならない／多くの愛するものを射殺し、暗殺し、毒殺するのだ／[…]／一羽の小鳥のふるえる舌がほしいばかりに、／四千の夜の沈黙と、四千の日の逆光線を／われわれは射殺した／[…]／たったひとりの餓えた子供の涙がいるばかりに、／四千の日の愛と四千の夜の憐みを／われわれは暗殺した／[…]／一匹の野良犬の恐怖がほしいばかりに、／四千の夜の想像力と四千の日のつめたい記憶を／われわれは毒殺した／一篇の詩を生むためには、／われわれはいとしいものを殺さなければならない／それは死者を甦らせるただひとつの道であり、／われわれはその道を行かなければならない」（田村隆一、『四千の日と夜』、荒地詩選（国文社）、荒地同人編、一九八〇年所収、一六〇－一六一頁）という過酷な背理は現実の虚偽的一面を撃ち、今なおリアリティーを失わない。

(6) Sigmund Freud: Totem und Tabu. Einige Übereinstimmungen im Seelenleben der Wilden und der Neurotiker. Einleitung von Mario Erdheim. Achte, unveränderte Auflage. Frankfurt am Main 2002, S. 108. なお同書からの引用、要約に際して、『トーテムとタブー』（吉田正巳訳）、フロイド選集（日本教文社）第六巻『文化論』、一九九〇年所収をも参考にした。

(7) Ebd., S. 109.

(8) Eduard Westermarck: Ursprung und Entwicklung der Moralbegriffe. 2 Bde. Übersetzt von Leopold Katscher. Leipzig 1913, 2. Bd., S. 424.

(9) Vgl. ebd., S. 425.

(10) Vgl. ebd., S. 426.

(11) Vgl. ebd., S. 426.

(12) Vgl. ebd., S. 426f.

(13) Vgl. ebd., S. 427.

(14) Vgl. ebd., S. 427.

(15) Hans Naumann: Primitive Gemeinschaftskultur. Beiträge zur Volkskunde und Mythologie. Jena 1921, S. 52.

(16) Ebd., S. 52.

(17) Ebd., S. 52.

(18) Vgl. E. Westermarck: A. a. O., S 424.

(19) Vgl. ebd., S. 424.

(20) Vgl. H. Naumann: Primitive Gemeinschaftskultur, S. 38 und S. 95.

(21) Vgl.„Der Treuschwur auf Tod und Leben". In: Sagen aus Pommern. Gesammelt und heraugegeben von Siegfried Neumann. Augsburg 1998, S. 235f.

(22) Vgl.„Treue in Leben und Tod". In: Sagen aus Mecklenburg. Gesammelt und heraugegeben von S. Neumann. Augsburg 1998, S. 247f.

(23) 柳田国男、『先祖の話』、定本柳田国男集第十巻（筑摩書房）一九六二年所収、九一頁参照。

(24) Paul Geiger: Totenreich. In: Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens. Berlin und Leipzig 1936/1937, Bd. VIII, Sp. 1087.

(25) Vgl. Jacob Grimm: Deutsche Mythologie. Um eine Einleitung vermehrter Nachdruck der 4. Auflage,

besorgt von Elard Hugo Meyer. Berlin 1875-78, Graz 1968, 2. Bd., S. 697.

(26) Zit. nach: J. Grimm, ebd., S. 694. Vgl. auch Rudolf Kleinpaul: Die Lebendigen und die Toten in Volksglauben, Religion und Sage. Leipzig 1898, S. 155.

(27) Vgl. J. Grimm: A. a. O., S. 694.

(28) Vgl. Karl Megnis: Seelenüberfahrt. In: Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens. Berlin und Leipzig 1935/1936, Bd. VII, Sp. 1569.

(29) Zit. nach: J. Grimm: A. a. O., S. 694.

(30) Vgl. J. Grimm, ebd., S. 695.

(31) Vgl. ebd., S. 695.

(32) Vgl. R. Kleinpaul: A. a. O., S. 156.

(33) Vgl. ebd., S. 156.

(34) Vgl. ebd., S. 156.

(35) Vgl. ebd., S. 156f.

(36) Vgl. ebd., S. 157.

(37) Vgl. ebd., S. 157.

(38) Vgl. ebd., S. 157.

(39) Vgl. ebd., S. 157.

(40) Vgl. ebd., S. 159.

(41) Vgl. H. Naumann: Primitive Gemeinschaftskultur, S. 55.

(42) Vgl. ebd., S. 55.

(43) Vgl. ebd., S. 56.

(44) Vgl. R. Kleinpaul: A. a. O., S. 158.

(45) Vgl. ebd., S. 164.

(46) Vgl. ebd., S. 165.

(47) 大林太良、『葬送の起源』(角川書店) 一九六五年、一七〇－一七三頁参照。

(48) 『日本人の他界観を探る』(さいたま川の博物館編) 二〇〇〇年、一三頁参照。

(49) 『古事記』(福永武彦訳)、日本の古典－1 (河出書房新社) 一九七二年所収、三四頁。

(50) 前掲書、三四頁。

(51) Vgl. R. Kleinpaul: A. a. O., S. 165.

(52) E. Westermarck: A. a. O., S. 428.

(53) Vgl. ebd., S. 428.

(54) R. Kleinpaul: A. a. O., S. 165.

(55) Ebd., S. 165.

(56) Ebd., S. 165.

(57) Vgl. H. Naumann: Primitive Gemeinschaftskultur, S. 42.

(58) H. Naumann: Grundzüge der deutschen Volkskunde. Leipzig 1922, S. 87.

(59) Ebd., S. 87.

(60) Vgl. ebd., S. 87.

(61) Vgl. ebd., S. 87f.

(62) Vgl. R. Kleinpaul: A. a. O., S. 121.

(63) Vgl. H. Naumann: Grundzüge der deutschen Volkskunde, S. 88.

(64) Vgl. H. Naumann: Primitive Gemeinschaftskultur, S. 26.

(65) Vgl. H. Naumann: Grundzüge der deutschen Volkskunde, S. 88.

(66) Vgl. ebd., S. 88.

(67) 以下は柳田国男、『幽霊思想の変遷』、定本柳田国男集第十五巻（筑摩書房）一九六二年所収、五六四－五六八頁に拠る。

(68) 前掲書、五六四－五六五頁。

(69) 前掲書、五六四頁。

(70) 前掲書、五六四頁。

(71) 前掲書、五六八頁。

(72) 前掲書、五六八頁。

(73) 前掲書、五六八頁。

(74) 前掲書、五六八頁。

(75) 前掲書、五六七頁。戦時中に書かれ、時局に対して迎合的で、祖霊信仰への強い傾きが顕著にうかがわれる『先祖の話』では、「合邦が辻といふ浄瑠璃の文句の中に、死霊は血縁の近いもの程怖ろしいといふことを説いて居る。よその民族の中にはたまたまさういふ俗信も有ったか知らぬが、少なくとも日本では、もとは決してそんなことを言はなかった」（『先祖の話』、九一頁）と言っている。

(76) 五来重、『怨霊と鎮魂』、『命と鎮魂』（河出書房新社）一九七五年所収、一〇頁参照。

(77) 前掲書、四六－四八頁参照。

(78) 前掲書、五一頁。

(79) 前掲書、四九頁参照。

(80) 前掲書、五〇頁参照。
(81) 前掲書、一〇頁参照。
(82) 前掲書、一五－一六頁参照。
(83) 前掲書、一六頁参照。
(84) 前掲書、一七頁参照。
(85) 前掲書、一七頁参照。
(86) 前掲書、一七頁参照。
(87) 前掲書、一八頁参照。
(88) 前掲書、五〇－五一頁参照。
(89) 前掲書、五一頁参照。
(90) 前掲書、五一頁参照。
(91) 前掲書、五一頁参照。
(92) 前掲書、四八頁参照。
(93) 前掲書、四九頁参照。
(94) 前掲書、五三頁。
(95) 桜井徳太郎、『日本人の祖先観』、『死霊の誘い』（人物往来社）一九六七年所収、一六九頁。
(96) H. Naumann: Primitive Gemeinschaftskultur, S. 61.
(97) Vgl. ebd., S. 26.
(98) Vgl. ebd., S. 27.
(99) Vgl. ebd., S. 27.

(100) Vgl. ebd., S. 32.

(101) Vgl. ebd., S. 32.

(102) Vgl. ebd., S. 32.

(103) R. Kleinpaul: A. a. O., S. 106.

(104) S. Freud: A. a. O., S. 110.

(105) Ebd., S. 110.

(106) Ebd., S. 111.

(107) Ebd., S. 111.

(108) Ebd., S. 111.

(109) Ebd., S. 112.

(110) Ebd., S. 111.

(111) Ebd., S. 111.

(112) Ebd., S. 117.

(113) Ebd., S. 117.

(114) Ebd., S. 112.

(115) Ebd., S. 112.

(116) Ebd., S. 113.

(117) フレイザー、前掲書、二一九頁。

(118) 前掲書、二一九頁。

(119) 前掲書、二一〇頁。

(120) 前掲書、一一一一頁参照。

(121) S. Freud: A. a. O., S. 105.

(122) Ebd., S. 116.

(123) 桜井徳太郎、前掲書、一七一頁。

(124) 前掲書、一七〇－一七一頁。

(125) R. Kleinpaul: A. a. O., S. 158.

(126) S. Freud: A. a. O., S. 116.

(127) Ebd., S. 117.

(128) Ebd., S. 117.

(129) Ebd., S. 110.

(130) Vgl. R. Kleinpaul: A. a. O., S. 108.

(131) Ebd., S. 123.

(132) Ebd., S. 123.

(133) J. W. von Goethe: Die Braut von Korinth. In: Johann Wolfgang von Goethe. Werke, Kommentare und Register. Hamburger Ausgabe in 14 Bde. Hamburg 1969. Bd.1, S. 272.

(134) Vgl. R. Kleinpaul: A. a. O., S. 123f.

(135) Vgl. S. Freud: A. a. O., S. 148.

(136) Herbert Marcuse: Triebstruktur und Gesellschaft. Eine Philosophischer Beitrag zu Sigmund Freud. Übersetzt von Marianne von Eckhardt-Jaffe. Frankfurt am Main 1979, Bd. 5, S. 84. いろんな語版では、Die Zivilisation muß sich gegen ***das Traumbild*** einer Welt verteidigen, die frei sein könnte. とはっきりしるが、原典

の英語版（Eros and Civilization. A philosophical Inquiry into Freud. Boston 1966）では、この箇所は、Civilisation has to defend itself against ***the specter*** of a world which could be free. であり、引用はオリジナルに拠った。なお、一八四八年にロンドンで数ヶ国語で公表された『共産党宣言』のあの有名な冒頭、「ヨーロッパに幽霊が、共産主義という幽霊が徘徊している」は、英語版（Karl Marx and Friedrich Engels: The Communist Manifesto. In: Essential Works of Socialim. Edited by Irving Howe. New Haven and London 1986）では、***A specter*** is haunting Europa—***the specter*** of communism. であり、ドイツ語版（Manifest der Kommunistischen Partei. London 1848）では、***Ein Gespenst*** geht um in Europa—***das Gespenst*** des Kommunismus. である。マルクーゼが、Civilisation has to defend itself against ***the specter*** of a world which could be free. と書いたとき、この誰でもが知っている『共産党宣言』の冒頭がかれの念頭にあったことは疑いえないので、***the specter*** のドイツ語訳としては、***das Gespenst***（「幽霊」）が適訳であり、***das Traumbild***（「夢の像」「幻像」）はいかにも不適切だろう。

(137) Ebd., S. 12.

(138) Ebd., S. 12.

(139) Ebd., S. 12f. この引用文中の「抑圧的文化」は、ドイツ語訳の前掲書によれば、「抑圧された文化」（die unterdrückte Kultur）であるが、これは明らかに「抑圧する文化」（die unterdrückende Kultur）の誤植と思われ、英語で書かれたオリジナルを参照したところ、該当の箇所は、「抑圧的文明」（repressive civilization）であり、本稿では「抑圧的文化」と訳した。訳者M. von Eckhardt-Jaffe もrepressiveをunterdrückend あるいは verdrängend と訳すと断っているので誤植であるのだろう。Vgl. H. Marcuse: eros and civilization, Boston 1966, S. 5. Vgl. auch H. Marcuse: Triebstruktur und Gesellschaf, S. 15. ちなみに、マルクーゼは、本人が前書きで言っているように、文化（Kultur）と文明（Zivilisation）とを正当にも区別していない。Vgl. H. Marcuse: Triebstruktur und Gesellschaft, S. 15.

(140) Vgl. ebd., S. 83.

(141) Ebd., S. 84.

(142) Ebd., S. 84.

(143) Ebd., S. 12.

(144) Ebd., S. 201.

(145) Ebd., S. 201.

(146) Vgl. Max Horkheimer/Theodor W. Adorno: Dialektik der Aufklärung. Philosophische Fragmente. In: Theodor Adorno. Gesammelte Schriften. Hrsg. von Rolf Tiedemann. Frankfurt am Main 1981, Bd. 3, S. 243. なお、マックス・ホルクハイマー／テオドーア・W・アドルノ（徳永恂訳）、『啓蒙の弁証法』（岩波書店）一九九〇年、三四二頁参照。

(147) Vgl. ebd., S. 243.

(148) Ebd., S. 243.

(149) Ebd., S. 243.

(150) Ebd., S. 243.

(151) 田村隆一、『立棺』、荒地詩集一九五二〈新装版〉（国文社）、一九五五年所収、二〇－二三頁。